

目次

はじめに

5

第一章 石原慎太郎氏の死に思う

14

第二章 老化という名の病気

20

がん／脳卒中・脳梗塞／心臓病／糖尿病／新型コロナウイルス COVID-19
骨折／認知症／肺炎

-2-

第三章

NMN ニコチンアミド・モノ・ヌクレオチド

31

【研究者による文献資料・著作書籍の紹介と解説】

第四章

NMNの高純度 Ⅱ 高品質？

39

NMNサプリの体験患者／NMN点滴の体験患者

第五章

21世紀デトックスサプリ開発の経緯

46

第六章

21世紀デトックスの概念

53

快便／快眠／快尿／快性／腸内フローラと梅

第七章

21世紀デトックスサプリ臨床試験

68

第八章

新型コロナウイルス COVID-19 を根絶

72

新型コロナウイルス治療薬最新情報

第一節 コロナウイルスの正体 78

第二節 コロナ検査とワクチン 103

第三節 イベルメクチン 119

-3-

目次

おわりに

127

参考文献

132

-2-

はじめに

人間五十年、下天のうちをくらぶれば夢幻の如くなり
一度生を享け、滅せぬもののあるべきか

戦国の武将織田信長公が桶狭間へ赴くときに、謡い舞った幸若舞こうわかまい「敦盛あつもり」の一節です。

はじめに
江戸時代、人びとの平均寿命は四〇代でした。戦後、日本人の寿命は急激に伸びて、現代では「人生100年時代」といわれるまでになっています。しかし、ヒトの一生は、長生きできればそれでよいというわけではありません。寿命は、平均寿命と健康寿命の二種類で考える必要があります。大切なのは死ぬまで健康でいられること、つまり、死ぬまで健康寿命を保つことです。

著者は老人保健施設（以下、老健）に一年半勤務した経験があります。施設には百歳に近い高齢者も入所されていました。そして、かつて社会で活躍した人たちが、どこにも行くこともできず、ただ施設内で生活している——生きているだけという現実を見せつけられました。それは人間の尊厳の在り方について、深く考えさせられた時期でもありました。

現在、さらに追い打ちをかけているのが新型コロナウイルスによるパンデミックです。家族や友人との面会さえも禁じられ、世間や社会から分断、孤立化することによって、入所者は認知症の進行がより顕著化しています。

なぜ、わたくしたちのだれもが希んでもいない、このような生き方、人生を強いられるのでしょうか。

あなたが高齢者になり健康が損なわれ、認知症などが進行すれば、家族や家庭での介護、ケアの負担は限界を超え、ときには家庭崩壊につながるからです。

しかし、百歳近い年齢でも元気に社会で活躍している高齢者も大勢います。いっ

たい、なぜでしょうか。勤務した老健の入所者の九九％は認知症発症者でした。そのなかに、五〇代の認知症男性がいて、保護者である父親とお会いしたことがあります。彼は八〇代でも会社役員として、立派に活躍していました。

高齢化とは老化することではありません。老化はだれにも同様に等しく出現する現象ではないのです。ここに大きなヒントがあります。

高齢になると、ヒトはがんになりやすくなります。日本の統計では、二人に一人ががんになり、三人に一人が亡くなります。残念ではありますが、それが現代医療の限界であり、わたくしたちが受け入れざるを得ない現実です。

見方を変えてみましょう。死ぬまでにがんを発症しないヒトが二人に一人もいるということです。その人たちは高齢でも元気で健康的な生活を過ごしており、ほとんどのヒトは、大きな病気も経験していません。わたくしたちが目指す目標が、そこに示されています。

はじめに
近年、ヒトには長寿遺伝子（サーチュイン遺伝子）が本来的に存在し、老化と

サーチュイン遺伝子には深い相関関係があることが判明しています。サーチュイン遺伝子は十代では活性化していますが、四〇代になると活動が低下してしまい、そのことにより、老化が進行していきます。

つまり、長寿遺伝子を活性化すれば老化を防げる——老化現象の発症と進行を抑えることが分かったのです。

そもそも、老化の進行を遅らせ、健康寿命を保つ活性化物質が、NMN（ニコチンアミド・モノ・ヌクレオチド）であることを発見したのは、ワシントン大学医学部教授今井眞一郎博士です。

そして、この発見された真実を踏まえ、さらに研究を深めることが本書のテーマであり、著者が長年探し求めてきた「がんを含む病氣予防法」です。

著者は自身で開発したコラーゲンを毎日飲用しています。周りからは年齢よりも若く見られるだけでなく、頸動脈のプラークもなく、がんにもならず、七十四歳には見えない若さを保持できていることで、クリニックの院長にも指名されま

した。この年齢で新規開業クリニックでの院長就任は、通常ではあり得ないことだと嬉しく思っています。

著者は老健に勤務し、多くの高齢者の症状を研究することで貴重なヒントを得て、21世紀デトックスサプリの開発に成功しました。

さらに、友人の紹介でNMNとの劇的な出会いを得ることができました。

著者は自身で開発した21世紀デトックスサプリとともに、新たにNMNを飲み始めて、二〇二二年二月で五か月間となります。

飲み始めて二〇日経過したときに視力が回復しました。その後、疲労感が消失して、考え方が前向きとなりました。著者は二〇二二年一月で七五歳となりました。七五歳といえば、後期高齢者です。運転免許証の更新では高齢者講習も受講しましたが、認知症検査、視野検査いずれも高得点で、試験官も褒めてくれるほどでした。

著者はこれまで、百歳までは現役で生きる自信はあったのですが、NMNを飲

み始めて四か月間で、あと五〇年、すなわち125歳まで現役で生きられると考えられるようになりました。単なる願望ではなく、確たる根拠があるからです。

その根拠は、NMNを飲み始めて三か月経過した二〇二一年一月に受けた健診と無縁ではありません。

胃カメラ、腹部超音波検査、レントゲン、血液検査、便潜血検査の結果として、胃がん、食道がん、十二指腸がん、肝臓がん、膵がん、前立腺がん、膀胱がん、腎がん、大腸がんなど、いずれの所見も見つかりませんでした。それだけでなく、従来患っていた萎縮性胃炎が改善（Ⅱ度からⅠ度へ、年齢でいうと四〇代）されていたのです。萎縮性胃炎と胃がんの関係は後述しますが、萎縮が改善したことは、胃がんのリスクが消えたことを意味します。

とくに驚いたのは、体重が減ったとか、飲酒を止めたわけでもないのに脂肪肝が消え、肝機能、血糖、HbA1c、脂質、PSA、便潜血などの数値も正常値の範囲内だったことです。

脂肪肝は肥満のために、五〇代から二〇年以上も続いていました。脂肪肝は、単に肝臓に脂肪が沈着するだけでなく、肝臓がんの発症原因でもあります。先輩の医師は、脂肪肝が原因で肝臓がんになりました。近年、肝炎ウイルスによる肝臓がんは、肝炎ウイルス治療の進歩で激減していますが、入れ替わるように、脂肪肝による肝臓がんが増えていきます。

体重が減ってもいらないのに脂肪肝が消えたということは、NMNの効果にほかなりません。この事実と萎縮性胃炎が改善したことが、がん予防につながると、本書を上梓するきっかけとなりました。

著者は四九歳のときに、日本橋（東京都中央区）にクリニックを開業しました。ストレスから過食となり、体重は九〇キロ近くまで増えていました。

あるとき、医師会の会合で隣に座った医師がスマートな体型をしているので尋ねてみると、なんと、その医師は一日一食しか食べないと答えたのです。著者にはとてもできないと、痩せ願望は諦めることにしました。

ところが、NMNを飲み始めて五か月間を経過して、一日一食を始めようと決意して、今年(二〇二二年)の一月二五日から現在まで過ごせるようになりました。もちろん、体重も減り始めています。

体重を減らす最大の目的はテニスです。テニスは学生時代から欠かさずに続けてきましたが、肥満のためにサーブの調子がよくなくて悩んでいたのです。痩せればよいと分かっていたいながら、実行できなかつたのです。それが、NMNの効果で前向きとなり、一日一食でも抵抗なく過ごせるようになりました。しかも、大学生時代のサーブの記憶が蘇ってきて、急にパワフルなサーブを安定して打ち込めるまでになりました。

先日、四〇代のプロコーチとテニスをしました。最初は、サーブ練習を続けて最後にゲームをしたところ、ほんの一ゲームでしたが、勝つたのです。いままで、一ゲームを取るのには容易ではありませんでした。相手は世界ランクで五百位だったプロです。著者が、プロのラファエル・ナダルのように、バックサイドに回り

込んでフォアハンドで打ち返したので、たいへん驚いていました。それもサーブが安定して、攻撃されないから自然に体が動いたからです。

著者のささやかな夢は世界医師テニス大会に出場して、年齢別部門で優勝することですが、いまでは、それも夢ではなくなりました。つい最近、肉体派で有名な国会議員と会食した際に、サーブの動画を見せて、何歳に見えるかと聞いたところ、四〇代だと答えました。一三五ページ(著者略歴)にQRコードを付記しましたので、興味のある読者は、著者のサーブの動画をご覧ください。

本書では、まず、老化は高齢化に必然的に伴う変化でなく病気であることの説明をしていきます。そのあとで、NMNの科学的根拠を明らかにするとともに、NMNで老化を治療、予防して、健康寿命を伸ばすための方法として、21世紀デトックスの解説をしています。

そして最後に、御徒町駅前内科クリニック院長として、発熱外来診療する立場から新型コロナウイルスの実態および根絶についても解説をおこないます。

第一章 石原慎太郎氏の死に思う

今年（二〇二二年二月）、八十九歳で亡くなられた石原慎太郎氏は、最晩年に行った曾野綾子氏との対談で、一〇五歳で亡くなった日野原重明聖路加国際病院長を訪問し、長寿の秘訣について教えを乞うた自身の経験を語っています。慎太郎氏が百歳以上生きようと考えていたことがうかがえるエピソードです。氏があと三〇年元気でいてくれたら、日本のためにどれだけ貢献されたかと思うと残念でなりません。

石原慎太郎氏の死因は膵臓すいぞうがんだといわれています。七〇八年前に発症が確認されて、重粒子線治療で完治したのですが、再発してしまいました。一度は完治したのに、なぜ、再発したのでしょうか。

著者はがんの免疫療法に一七年間取り組み、六〇〇症例以上を経験してきてい

ます。がん治療研究の歴史について概略をふり返り、再発の原因について説明しましょう。

一九六〇年代にオーストラリアのフランク・マクファーレン・バーネット博士が、ヒトの「免疫監視機構」を発見してノーベル賞を受賞しました。健康人で、毎日、がん細胞が数千と生まれてもがんにならないのは、人体内に備わった免疫監視機構があるからだとする内容でした。

一九七〇年代になると、健康人の血液をがん細胞にふりかけると、がんが消滅する現象を研究した結果から、ヒトの血液中に存在するナチュラルキラー細胞（NK細胞）が発見されました。NK細胞とは、生まれながらにがんを発見して殺す働きを有していることから命名された名称です。そして、NK細胞こそが、免疫監視機構の主役であることが判明したのです。このNK細胞の働きは、「自然免疫」と呼ばれています。

それに対して、NK細胞と同じような働きをする細胞には、T（Thymus「胸

腺) 細胞と呼ばれる免疫細胞の存在が知られています。しかし、T細胞はがん抗原で感作しないと、がんを殺せません。T細胞が「獲得免疫」と呼ばれる所以です。しかも殺傷能力は、NK細胞より弱くなります。一方で、NK細胞の増殖活性化は、たいへん困難な工程をとまなう作業だったのですが、京都大学出身の勅使河原計介氏が、実用化に成功しています。

すべてのヒトの血液中には、NK細胞が存在しますが、ヒトにより活性が高いヒトと、そうでないヒトがいます。NK活性が高いヒトは風邪も引きません。

調べてみると、がん患者はすべてNK活性が低いという結果が出ています。なぜなら、がんは自身を増殖するために、NK活性を弱めてしまうからです。

健常者でNK活性が低くなる原因は、主に強いストレスを長期間受け続けることと、老化による低下です。がんは四〇代後半より多発します。高齢者にがんが多発するのは、NK細胞の活性低下と無縁ではありません。

石原慎太郎氏は重粒子線治療で膵臓のがん細胞は完治しても、血中の循環がん細胞(CTC)を退治できませんでした。CTCがあってもNK細胞によって殺されているうちはよいのですが、老化とともにNK活性が低下し、その結果、がん細胞が増殖して、がんが再発したと考えられます。

著者が治療したがん患者約六〇〇人のうち、完治したのは一〇%に満たないのが実情でした。

その要因のひとつとして、日本ではNK細胞の培養費用が高額であり、継続的な治療を受けられなくなるという現実があります。加えて、ステージIVの末期になつてから、著者を訪ねてくる患者が圧倒的だからでした。当然のことですが、がん患者のほぼ全員が、クリニックを訪れる前に標準治療を受けています。抗がん剤です。抗がん剤はNK活性を低下させるので、培養してもNK活性が十分上らないことも常でした。

がん細胞は一センチ角の塊に約十億個存在します。NK細胞とがん細胞との戦

いは、一対一です。一回に五〜十億個の活性化されたNK細胞を投与すると、患者はサイトカインストームで四〇度以上の高熱に冒されることとなります。

ステージⅣの段階では、患者のがん細胞の数は数千億個です。そのため、末期がんを完治させるためには相当な期間と費用が必要となります。

このような医療現場の経験から、著者は自身の一七年間の医療活動経験の結論として、がんを治療するよりも、予防することに注力しようと考えました。

石原慎太郎氏は脳梗塞も罹っていました。

脳梗塞は、頸動脈に出来たプラーク（コレステロールとコラーゲンの塊）が脳にまで飛んだことで発症したと考えられます。慎太郎氏は、検査で頸動脈に大きなプラークが見つかったのですが、放置して発症してしまったのです。それでも一時は記憶障害の後遺症に悩んでも、克服されて執筆されるようになったのですから、驚異的な回復力と言うほかありません。

著者が、NMNについて本書を書くこと考えた動機は、自分自身の、胃がん、肝臓がんのリスクが本物のNMNによって消滅したことは、偶然ではなく多くの人に知ってもらいたいと思ったからです。

慎太郎氏がもしNMNを知っていれば125歳まで現役で活躍されたことだと思うと大変残念です。

第二章 老化という名の病気

二〇一〇年、英国王立協会は世界の著名な研究者一九名を招いて、「人間と老化」を議題に二日間の討論会を開催しました。その結果、「ヒトにとつての老化は避けて通れないものではなく、幅広い病理学的帰結を伴う疾患のプロセスである。」と結論づけました。

分かりやすく説明すると、がんや心臓病だけでなく、アルツハイマー病など、一般的に加齢で避けられないと考えられていたさまざまな病気は、実は、それ自体が老化という病気の個々の症状（症候群）に過ぎないとしたのです。

すなわち、わたくしたちが従来イメージしていた老化という現象は、単に高齢化に伴う必然的な症状などではなくて、「老化症候群（著者による命名）」という名前の病気だったのです。一般的に、高齢者は病気を多発しやすい状況になって

います。

でも、元気な高齢者がいることも事実です。その人たちは、たとえ高齢化はしていても、老化症候群という病気にはかかっていないから、元気で健康でいられるのです。

そして、老化が病気であるとすれば、そこには原因があり、避けて通れない症状と諦める必然性もなく、治療法を探して治すことができます。

それが、「NMN」なのです。

老化症候群に含まれる主な病気を列挙してみます。

- 1、がん
- 2、脳卒中
- 3、心臓病
- 4、糖尿病
- 5、新型コロナウイルスによる重篤な合併症

- 6、骨粗鬆による骨折
- 7、認知症
- 8、嚥下性肺炎
- 9、更年期障害

病は、ある日突然に顔をだすものではありません。老化の進行ともに発症するのです。

以下に詳しく解説していきます。

1、がん

がんは遺伝的要素も否定できませんが、老化を主たる原因として発症します。著者の専門領域である消化器内視鏡で発見する胃がん、食道がん、大腸がんで解説してみましよう。

従来、胃がんの原因としては、ヘリコバクターピロリ菌が挙げられています。そこで、ピロリ菌の除菌療法は胃がん予防の決定版として、広くおこなわれてきました。

にもかかわらず、全がんにおける胃がんの死亡率は、いまだに第三位と上位を占めているのが現状です（二〇一九年、全国統計）。ピロリ菌を除菌しても死亡率がこれだけ高いのは、ピロリ菌以外にも胃がんを発症する原因があるからです。

それが老化という名の病気です。ヒトは老化すると萎縮性胃炎になります。萎縮性胃炎は慢性炎症として進行性変化となります。辛い食事や多量の飲酒に晒され続けると、糜爛（『ただれ』）が発生します。その部位を生検すると、腸上皮化生が見つかることがあります。腸上皮化生とは胃の細胞が腸の細胞に変化することで、異化と呼ばれます。専門家は、このような状況で、受診者がすでに胃の前がん状態にあると判断します。

腸上皮化生はさらに進展すると腺腫となりますが、これを内視鏡切除して顕微